

ひみつのかれん

く外国人お姉さんキャラにたつぷり愛されちゃう百合音声く

2016年11月22日

作者名…新條 いな

ninashinjou@gmail.com

【1】ある冬の夜、あなたの部屋で

冬。十二月の寒い晩。深夜一時ごろ。

主人公、寮の自室（個室）で寝入っている。

しかし、身体に密着する暖かいものを感じ、ゆっくりと目を覚ます。
目を開けると、すぐそばでカレンが楽しそうに笑っている。

① SE: 窓を叩く、冷たい冬の風の音

② SE: もぞもぞと布団の中のカレンが動く、布がこすれる音

「笑いをこらえる楽しげな声。見つからないように添い寝していたが、次第にこらえきれなくなり」

ふふふふ……。

【やや申し訳なさそうに。起こすつもりはなかったため】
あ……起きた？」

カレンは夜間、こうして頻繁に主人公の個室に忍び込んでくる。

主人公、慣れた様子で対応する。

主人公、カレンが鍵のついた部屋に自然と入ってくることから、彼女が人間ではないことには薄々勘付いている。

③ SE: 主人公がベッド脇のランプの明かりをつける「カチャ」というスイッチ音

「申し訳なさそうにやや小声で」

ごめんなさい……起こしてしまったわね。

【主人公に侵入を咎められるどころか、『ここまで来る間、寒くなかった？』と聞かれ。さらに髪を撫でられ、嬉しそうに】

え？ 『ここまで寒くなかった？』って？

もう暖かいわ！ 貴方とこうしてくっついてるんだもの。

【上機嫌で】

ふふふ……気持ちいい。

うん？ ええ……外ね……。雪が降っていてよ。びっくりしたわ。

今年は、寒くなりそうね。

【主人公と足の甲をびったりくっつけ、足を暖めてもらい】

ふふ……ありがとう。暖かいわ。

【自分の足が冷たいので、申し訳なさそうに。主人公の目には見えないが、カレンの右足には鉄の足かせと鎖がかかっている。そのため不自然に冷たい】

ええ……。そうなの。足が、とても冷えるの。

……でも。貴方が暖めてくれるから。もう、平気よ。

【幸せそうに、しみじみと】

貴方の足の甲、暖かい」

二人、目が合う。

主人公、ぎこちなく顔を寄せ、カレンの頬にキスをする。

「頬にキスされ」

あら。……くすぐつたい。ちゅっ。ふふ……うふふ。

【少し緊張した面持ちで、不安そうに切りだす】

ねえ。もうすぐ、冬休みね。貴方は。今年はご実家に戻られないの？

【『戻らないよ。カレンという。冬休み、一緒に行きたいところは決まった？』と聞かれ】

『戻らない』？ 『私と冬休み、一緒に行きたいところはある』……？

【一呼吸置き。なぜか申し訳なさそうに】

本当に、私と、過ごしてくれるのね……。

【不自然な沈黙が三秒ほど続く。それから、やがて意を決したように】

……あのね。

今日は私……貴方にその話をしようと思って、来たの」

カレン、ベッドから起き上がり、正座して姿勢を直す。

④ SE:掛け布団をめくり、カレンが布団から起きあがる音

「真剣に」

あのね。こんな時間に、こんなことをお願いするのは、非常識だし。

とても申し訳ないと思うのだけど……。

私。前々から。貴方にお話ししなくてはいけないことがあって……。

【少し不安そうに】

貴方さえ、良ければ……。これから、一緒に来てほしいところがあるの。

【やや間を置き。毅然と振る舞おうとしているが、声が震えている】

本当は……話すかどうか。とても迷ったの。

【気持ちをごらえて、静かに。淡々と】

……でも。

都合の悪いことを、隠して。

教えたくないことを、見ないようにして。

何もかも秘密にしていれば……。

私たち、ずっと仲良しでいられるのかもしれない。

私はずっと……貴方の恋人を気取って。卒業まで楽しく暮らせるのかもしれない。

【一呼吸置き。迷いなく毅然と】

……でも、私、そんな不誠実なこととはできない。

貴方には、本当のことを伝えたいの。

【震える声で、真剣に】

貴方のことが……本当に好きだから。

【真摯に】

お願い。私と。一緒に来ていただけるかしら」

⑤ SE: ギイ、と主人公の部屋の扉が開く音

⑥ SE: 扉が閉じる音

⑦ SE: ひた、ひた、と廊下を歩く二人分の音

二人、寮の廊下を歩き、図書館へ向かう。

主人公、普段とは明らかに様子の違うカレンが心配になり、カレンの手を強く握る。

「【申し訳なさそうに。声を小さめに】

……ありがとう。私の急なお願いを聞いてくれて。

【主人公に手をそっと握られて驚く】

あ……。

【『寒いから、手を繋いでいこう?』と言われ。驚きつつとても嬉しそうに】

ええ! 手を繋ぎましょう。

【主人公の言葉で、緊張がほぐれる】

ふふ……嬉しい……。うん。恋人繋ぎしちゃうから。

『腕も組んでいい?』もちろんよ!

【主人公は『カレンは足が悪い』と思っている。そのため、こうして腕を組んでゆっくり歩くことが多い。なので幸せそうに】

うん。いつものように、たっぷりくっついて歩きましょう?

【心から真摯に】

ありがとう……。大好きよ。

【少し不安そうな調子に戻って】

私……こうやって。とても優しい貴方だから、話したいと思ったの。

……いいえ、『話したい』というのは違うのかもね。

本当はもう。貴方もすでに知っていることなのかもしれないから。

【声のトーンが明るくなり】

そうよね。貴方なら、これから何が起きるのか、きっともう想像がついているのかもね。

【ふっと声のトーンが低くなる】

それでも、貴方は一緒にいてくれる……。

好き。私、貴方のこと、本当に大好きよ。

貴方のような誠実な人と出会えて、本当に良かったと思ってる」

⑧ SE: ひた、ひた、と廊下を歩く二人分の音

「ここから※マークまで全体的にゆっくりと」

あのね……。私、ずっと考えていたの。

初めて貴方を図書館で見つけて……。素敵だなんて、思った日から。

どうしたら、貴方と仲良くなれるのかしら？ って。

お友達になれてからは……。

どうしたら、私を友達以上に想ってくれるようになるかしらって。

そして。両想いになれてからは。

【一呼吸置き。ややトーンが下がり、意味深に】

どうしたら一日でも長く、貴方と幸せに過ごせるのかしらって……。※

うん？ 『初めて会ったのは、二年生の始業式の日、教室じゃないの？』って？

【いたずらっぽく】

そうよ。本当は違ったの。私。それよりも前から、隠れて貴方を見つめていたの！

気付かなかった？

【楽しみに。『こんなに』を強調して】

こんなに視線を送っていたのよ！

【うっとり】

だって貴方、とても素敵だったんだもの。私、『絶対仲良くなりたい』って思ったの。

……その時は。まだ、お友達になりたいって気持ちだったけど。

【「恋人」、という言葉だけやや恥ずかしそうに】

今は……恋人。として、ね！

【楽しみに】

ふふっ。ええ……こっちょ。図書館に向かっているの。私たち。

『閉館してる』？

【一呼吸置き】

ううん。それは大丈夫なの。

【少しでも恐ろしく聞こえるように】

私、いつでもここに入れるの」

【2】カレンのひみつ

⑨ SE: ギイイ、と扉が勝手に開く音

【優しい声で。驚いているものの、それでも自分の手を離さない主人公に内心感激して】
「っちょよ」

⑩ SE: カツ、カツ、と図書館の中を歩く二人分の音

「暗いわよね。今、少しでもだけ灯りをつけるわ」

⑪ SE: パチン、とカレンが指を鳴らす音

図書館に、充分歩ける程度の明かりがそつと灯る。

驚く主人公に対し、カレンは図書館の中を迷いなく歩いていく。

カレン、主人公が驚きで無言になってしまい、内心不安に感じている。

そのため、沈黙を埋めるように、平静を装いながらこの図書館の歴史について話し出す。

「そうそう。知ってる？」

昔この図書館、コウモリを飼っていたそうよ。

コウモリは、紙を食べる害虫を駆除してくれるから。本とはとても相性がいいんですって。

昔は本って、とても貴重だったから。

この建物自体も、本が盗まれないよう。まるで迷路のように作られたみたい。

館内の全容は、限られた存在だけ。

「……そう、司書くらいしか把握していない」

⑫ SE: カチャ、とスイッチを押す音

⑬ SE: ガラガラガラ、本棚がずれて開く音

カレン、秘密の扉の奥へ主人公を案内する。

その奥には、図書委員である主人公すらまったく知らない、迷路のような空間が続いている。

「すごいわよね。ここって本当に本格的なの。普通の図書館に見えるのにな。」

【※マークまで全体的にゆっくりと】

隠し扉に、隠し階段。

四つん這いにならないと進めないような、細くて狭い通路。

一冊の本を取るのも一苦労なほどの、高い高い本棚。

そんな秘密の構造を、この図書館もたくさん持っている。

蔵書を守るために……ね。※

……ああ、でも。それでもまだ盗まれないか不安な時は、こんなことまでしたそうよ。

『鎖付き図書（くさりつきとしよ）』って知ってる？

【※マークまで、淡々と話しつつも、少しうつろで恐ろしげな雰囲気で】

数ある本の中でも……特に大切なものたちを。

絶対に奪われないように……。

鎖を付けて、本棚や机に繋いで。

決して盗まれないように、保管する習慣のことなんだけど……。※

【明るく可愛らしく。恐ろしさは完全に消えて】

ふふ。さすがにそこまでされちゃったら、本はどこにも行けやしないわね。

うん？ 『ずいぶん昔のことまで知っているんだね』？

『カレンは、今年この学校に来たばかりなんじゃないの？』？

ええ。私全部知ってるの。多分、司書さんたちも知らないようなことも、みんな。ね。

【わざと温度のない、わずかに恐ろしく聞こえる声で】

……だって私。ずっとこの図書館にいたから」

⑭ SE: ギイイ、とカレンが扉を開く音

「……いらつしゃい。ここが、私の部屋なの。」

【主人公が動揺しているのに気づき、悲しくなり一瞬間が空く。それでも努めて明るく】

ふふ、いい部屋でしょう？

寮に私の部屋がなかったのはね、ここに住んでいたからよ。

ここまで来てくれて、本当にありがとう。

できることなら。口頭でお伝えしたかったのだけど……。

私の本当の姿は、この部屋の中じゃないと見られないから。

……見てくれた方が、真実が伝わると思ったから」

⑮ SE: じゅわ、と重い鎖の音

主人公、音がしてカレンの足元を見る。

そして、鎖の存在に初めて気づく。

カレンの右足には、ずっしりと重い鎖が繋がっている。

「そう……。さっき話したわよね」

カレン、鎖のかかった足で主人公に一步近づく。

⑩ SE: じゃら、と重い鎖の音

「貴重な本は……盗難に遭わないよう、鎖で繋ぐ習慣があったって」

⑪ SE: じゃら、と重い鎖の音

「鎖で繋がれた。外には、決して出られないように囚われた本。

【声がわずかに低くなる】

……その中に閉じ込められた、一枚の絵」

⑫ SE: カレンが机の上にある一冊の本を取る、コト、という音

⑬ SE: カレンが本のページをめくる音

カレン、本を開き、自分が描かれた絵を指さす。

【「落ち着いた様子で。『それ』を強調して」

『それ』が私よ。

『鎖付き図書』に描かれた一枚の絵。

それが、貴方達がカレン・ラングフォードだと思っていた人間の正体。

【「つとめて冷静に」

『私』はずっとここにいる。

私の身体はずっと、この本の中に絵として閉じ込められている。

私は身体を失ったまま、幽霊として生きている。

ずっと年を取ることができません。心だけが本の呪いから逃れて……。

もう、百年以上もの間、ずっと。

【「次の発言は嘘。主人公を怖がらせようとしている」

何度も、何度も。恵波（えなみ）の島女学院の生徒になりすまし。

【「うつろな雰囲気で。どこか恐ろしく聞こえるように」

今、貴方の目の前にいる……」

五秒間沈黙。

②⑩ SE:じゅら、と重い鎖の音

【主人公が黙ったままなので不安になり。不自然に明るく振る舞う】

ふふ、びっくりした？

でも大丈夫よ。

私、幽霊？ だけど……。悪いことはなんにもできないの！

【『たとえば貴方に憑りついたりなんて絶対できないし』と言いかけ】

たとえば貴方にとり、

②⑪ SE:主人公がカレンに抱きつく、どさ、という音

②⑫ SE:主人公がカレンを抱きしめる、ぎゅ、という音

【驚きつつも歓喜して】

あ……。ん……。

【やや間を置き。優しく、母親のような声で】

どうしたの？

急に抱きついたりして。大丈夫よ。私お化けだけど……。ちゃんとここにいるから」

②⑬ SE:カレンが主人公の背中を優しく叩く、とん、とん、という音

【「わずかな間。主人公が泣いているのに気づいて、申し訳なさそうに】

ねえ……。どうして、貴方が泣いているの？

【身体を離し、慌てて】

そんな。『気づいてあげられなくてごめんね』なんて言わないで……。

【主人公を励まそうと明るく】

当たり前じゃない。同級生が百歳以上生きてる幽霊なんて……。

そんなのまずわからないわよ。だからいいのよ。気にしないで！

【一呼吸置き】

それに、私はね？ 貴方が私の正体を知ってくれただけで、本当に嬉しいの。

【申し訳なさそうにしつつも、本当に嬉しそうに】

だって。これで貴方への秘密は何もなくなった……。

だから今、とても幸せなのよ。やっとなんか言えたから……。

貴方は私のこんな。残念ながら一般的とは言えない秘密を。

気味悪がりもせず、怒りもせず。受け入れて聞いてくれた。

【※マークまで、泣いている主人公の顔を見て、いとおしむように】
それだけじゃない……。

貴方は私のことを、こんなに悲しい顔をしてくれるほど……氣遣ってくれている。
だから、私は今とても満たされているわ。
でも……ごめんなさいね。

私は幸せだけれど……貴方は私の秘密を知って、苦しむことになってしまったわね。 ※

【心底申し訳なさそうに】
ねえ、お願い。泣かないで……」

②④ SE: カレンが主人公の背中を優しく叩く、とん、とん、という音 (②③を二回分流す)

「やや間を置き。母親のように優しい声で」
そうだ。ね、そこにかけましょうか。

【※マークまで主人公を悲しませないため、『ここは主人公が思っているよりも良い場所』と強調しようとする】

見た目より柔らかいのよ、そのベッド。
場所はいまいちだけど。なかなかいい部屋だと思わない？ ころこ。
長い時間をかけて、色々工夫して。今の形にしたのよ！

図書館のこんな奥まった場所にあるから。冬も案外、暖かいしね。 ※

……落ち着いた？ ……良かった。

貴方は本当に優しい人ね……。私を想って、泣いてくれるのね。

うん？ 『カレンが足を引きずっていたのは、鎖がかかっていたせい？』

【※マークまで、主人公を氣遣い、できるだけ悲しく聞こえないように、穏やかに話す】
そうよ。足が悪かったわけじゃないの。

これ、ちよつと重いから……。

歩くことはできても。走ったりとか……スポーツは難しくて。

右足首だけ、いつもすごく冷たかったのも。

見えなかっただけで、ずっと鎖があったからよ。

……ごめんなさい。これ、見苦しいし……。 ※

【少しおどけて】

悪いことをした人みたいだし？

【主人公を氣遣うように優しく】

できれば、貴方には見せたくなかったのだけれど。

私の正体を知ってもらうには、これが一番だと思ったから。

見てもらおうと、ここへ来てもらったの。

【申し訳なさそうに切り出す】

だからね、私。実体はこの本の中にあるから。

幽霊として、壁をすり抜けられたりはできるんだけど……。

この通り、足が、本と。鎖で繋がれていて……。

そして本自体も、この部屋の本棚と繋がっているから。

【悲壮感はなく、淡々と事実を告げる雰囲気で】

私はこの鎖の届く範囲しか行動できない。つまり、学校の外へ出ることはできないの。前に校外学習をお休みしたのも、そういう理由。

せっかく色々、冬休みの過ごし方を考えてくれていたのに。本当にごめんなさいね。

私、貴方と出かけることはできない」

主人公、黙っている。

五秒ほど沈黙。

カレン『やはり気味悪がられてしまったのだろうか』と不安になる。

カレン、主人公への強い遠慮の気持ちが芽生え、先ほどまでのように主人公に甘えるのが急に怖くなる。

また、年上と知られた以上、対応に振る舞わなくてはいけないのでは、と考えるようになる。そのため、主人公に甘えたい気持ちを隠して、無理して年上らしく振る舞おうとし始める。

【主人公を気遣い穏やかに】

……あ。ごめんなさい。矢継ぎ早に話して。

急に色んなことを知らされて、驚いたわよね。

そろそろ、寮に戻りましょうか。

【少し淋しそうに】

……帰りは送らせてね。幽霊のエスコートなんて、おかしい話かもしれないけど。

一人では心配だから……。

【やや間を置き。『呪いを、解く方法はないの?』と聞かれ】

え? 『呪いを、解く方法』……?

【その考えはなかったので驚き】

貴方……それを考えていたの?

【一瞬ためらうが、さほど悲壮感はなく。むしろ、真実を告げること主人公がショックを受けないか、気遣っている】

ありがとう。でも……。多分、解く方法はないと思うわ。

今まで、これでも色々試してみたつもりなんだけど。

鎖は、何をやっても壊れなかったし。

鎖と繋がった本棚は、

【一瞬考えるが、とても現実的ではない、という調子で】

とても動かせるようなものじゃない……。

『そもそも物理的な力では、呪いには対抗できないのでは』というのが私の結論。いいのよ。解けないものは解けないんだもの！ 貴方が気にすることじゃないわ。

【本音半分、強がり半分で。やや早口になる】

第一私、幽霊の暮らしも気に入っているし。

いつまでも若いままであられるし。いくら食べても太らないし。

さつきみたいに。夜中……貴方の部屋に忍び込むことだってできる！

だから、私は。今貴方と一緒に過ごせればそれで充分。

【優しく】

ああ、もう！ また泣いているの？

こんなに心配してもらえるなんて、私は本当に幸せものね」

② SE:二人が抱き合う、ぎゅ、という音

【心から、実感を込めて】

大好きよ。

【甘く】

ありがとう……。私、貴方に話して、本当に良かった。

これまで結構長く生きてきたつもりだけど……。

こんなに幸せな気持ちは、初めてよ。

【努めて穏やかに話しつつ、内心恐る恐る】

ねえ。こんな私だけれど……。これからも一緒にいてくれる？

【『もちろんだよ』と言われ。返答を待つ分、やや間を置く。泣きそうな声で】

ありがとう……。とても。とても嬉しいわ。

私。貴方がいてくれるなら。これからもずっと頑張れる。

【母親のように優しく】

ふふ。可愛い。こんなに泣いちゃって。好きよ……。

【やや間を置き。少し不安そうに】

ねえ……。キスしてもいい？

【主人公が頷き、自分から唇を寄せてきて。触れるだけの軽いキス】

ん……。ちゅっ。

大好きよ……。私の愛しい人。

【やや間を置き。名残惜しいが時間も遅いので『じゃあ、そろそろ戻りましょうか』と言いかける】

……。じゃあ、そろそろ……？

【『まだここにいてもいい？ カレンの住んでいる部屋をもっとよく見たい』と言われ】

……えっ？ もう少しここにいたいのか？ もちろん、よくってよ。

【※マークまで、嬉しそうに、冗談めかして話す】

でも、本当はちよつと怖かったでしょう。ここまで来るの。

図書館に入ったあたりから、私。明らかに普通じゃなかったものね。

『取って食われるんじゃない？』って思ったんじゃない？ ※

【主人公が真剣に否定するので暖かい気持ちになり】

ふふ。冗談よ。貴方はそういう人よね。いつも、私のことを一番に考えてくれる。

誠実で、優しく。とても勇敢で……一生懸命な人。

貴方自身はなんだかいつも自信なさそうにしているけど……。貴方は本当に素敵な人よ。

【手を握って】

大好き……。すべてを打ち明けても、まだこうしてられるなんて夢みたい。
嬉しいわ……。

【ふいに主人公に抱きしめられ】

あっ……！？」

②⑥ SE: 主人公がカレンに抱きつく、どき、という音

②⑦ SE: 主人公がカレンを抱きしめる、ぎゅ、という音

【『本当に、呪いを解く方法はないの？』と言われ。しばし間を置き】

なあに？ まだ私の呪いのことを気にしているの？

そうね……。私も、わからない。

私なりに呪いを解こうと……これまで色々やってみた。

魔法の本に書いてある通りにしてみたり……。

いっそのこと、本棚ごと外に出られたりしないかしら……なんて。

力ずくな方法も試してみたわ。

でも、結果は同じ。私は出られなかった。

【やや間を置き。※マークまで、主人公を悲しませないよう、あくまで落ち着いた調子で】

……本当はね。

心折れそうになったこともあったわ。

すべてに絶望して……ずっとこの部屋で泣いていたこともあった。 ※

……でもね。私はある人に出会って平気になったの。

【一呼吸置き】

ある日、何日もふさぎ込んで、ようやく部屋から出てみた日……。

私は夜の図書館の中。一人真剣に勉強している人を見つけたの。

はじめはその日だけのことと思ったわ。試験前なのねって。

……でも、その人は、毎日やってきた。

掃除、委員会活動……お友達からのお誘い？

様々な都合から。やってくる時間はまちまちだったけれど。

その人は必ず来て、しっかり学んで寮に戻っていく。

私は、その人が気になった……。

一生懸命なその横顔が、とても美しかったから。

【一呼吸置き】

そうして。そんな彼女を見ているうち。私は力になれたらって思うようになった。いつも貴方を見ていたと。貴方の姿に、いつも励まされていたと……。

どうしても直接伝えて……傍で、応援したくなったの。

【一呼吸置き。小さく笑って】

もう、わかるでしょ？

今の私が笑って生きられるのは、すべて貴方のおかげ。

今の私は、貴方の力になりたくてここにいる……。

だからもし、貴方も私のことを想っていてくれるなら。

どうか笑って欲しいの。

自分から打ち明けておいて、こんなことを頼むのはおかしい話だけど……。

どうか私のことを。

これまで通り普通の。他の女子生徒と同じように扱ってほしいの。

だって私。貴方と一緒に学校生活を送りたくて部屋の外に出たんだもの」

カレン、身体を離して主人公と向き合う。それから、頬に触れて話す。

本当は『今までずっと一人ぼっちで淋しかった』『出会う前は主人公の一生懸命さが、出会ってからは主人公の優しさが自分の心の支えだった』とすべて打ち明けて、思いっきり甘えたいと思っている。

しかし自分よりもずっと年下の主人公にそれは荷が重すぎると感じ、必死で姉や母親のように振る舞おうとする。

「『『前から、隠れて見つめていた』っていうのは……』と聞かれ」

……ええ。そうよ。教室でお会いする前から好きだったって言うのはそういうこと！

私は貴方とお友達になって……。

……こうやって、仲良くなるために外へ出た。

それだけ貴方が好きだったの。

一目ぼれ？　っていうのは違うけれど……。

お話しする前から、貴方が素敵なことは知っていたわ。

だから……今こうして、何の罪悪感もなく貴方に触れられることが、本当に嬉しい。

【『今までは罪悪感があったの？』と聞かれ。一呼吸置き。思い当たる節があるため、やや

【氣まずそうに】

ああ……それはね。貴方の言う通りよ。

【声がやや小さくなる】

今までは、いけないと思っていたの。その……貴方と、深い関係になることは……だって。正体を告げずに、キス以上のことをするのは……。あまりにも不誠実だし。私なら、されたく、ないし……。

【追及されるのがつらいので、主人公が話す間を与えず】

ええ。もちろん反省しているわ。事情を告げなかったことは……。

貴方もおかしいと思っていたわよね。

いつも。あれだけ自分からべたべたしておいて……。

いざそういう雰囲気になると、逃げるっていうのは、いけなかったわ……。

【真剣に謝罪して】

本当にごめんなさい。

でも、貴方は優しいから。

何か理由があるんだろうと、察して。いつも私の気持ちを尊重してくれていた。

【申し訳なさそうにしつつも嬉しそうに】

本当はね……。それすら私は嬉しかったの。

二人きりで、過ごしている時。

貴方が、勇気を出して。そっと私に触れてくれる時……。

私を氣遣って、手が離れる時さえ。私はとても幸せだった。いつもどきどきして……。

【一瞬間を置き。真剣に】

何度も。何度も貴方とひとつになりたいと思った……。

そして、いつも考えたの。私が普通の……ただの人間の女の子だったら。

【やや言いづらそうに、ゆっくりと】

この気持ちを……。貴方と、とても恥ずかしいことだって。してみたいって、気持ちを。とつくに打ち明けて、もっと深い間柄になれていたのかしらって……」

カレン、正体を打ち明けたことで、すっかり自分に自信をなくしている。

そのため、主人公をこのまま部屋へ帰してしまったら、一晩のうちに主人公の気持ちは変わってしまう、やはり自分は気味悪がられ、嫌われてしまうのではと考える。

ならば、せめて一度きりでもいいから主人公と触れ合いたいと考え、どうにか主人公を誘惑できないかと、必死で言葉を選ぶ。

【「一呼吸置き。ゆっくりと、ドキドキしながら切り出す】

……ねえ。今……でも。私に触れたいと思ってくれ、る？

【『もちろんだよ。何を知っても、私の気持ちは変わらない。カレンが好き』と言われ。泣

きそうな声で】

本当……？ 私を。今でも、恋人だと。

その。一人の女性として。魅力的だと思ってくれる……？

【『当たり前でしょう！』と即答され。涙ぐんで】

ありがとう。嬉しい……！

私。貴方を好きになって、本当に良かった……。

【主人公から軽く一度だけキスされ】

ちゅっ。ふふ……。

【心を込めて】

ありがとう。

ああ。なんだか今、貴方と初めてキスしたみたいに感じる……。

あの……ね？ もし、貴方さえ、今もそう思ってくれるのであれば……。

私は。貴方ともっと近くなりたいと思ってる。

【振り絞るように】

ううん、ずっと前から。貴方ともっと触れ合いたいと思ってる……」

【3】はじめての脱がせあいっこと、あなたからのおっぱい愛撫

二人、ベッドの上でキスをする。

主人公、カレンの様子が妙なことには気づいている。

主人公、カレンが今にも泣きだしそうな顔で触れてくるので、受け止めつつ、どうすることがカレンにとって最も良いのか真剣に考えている。

カレン、きつと今日限りだろうというあきらめの気持ちと、優しい主人公に強く期待してしまいう気持ちが混じる。

本当は主人公の愛情を実感して安堵したいが、どうしてもそれができない。

しかし、主人公に優しくされるたびに気持ちが強く揺さぶられ、自分の気持ちをすべて打ち明けてもいいのではと思うあまり、時折本音が漏れてしまう。

「二十秒ほどキスする。軽く唇を合わせるだけのキスから、次第に舌を入れる深いキスになっていく。それから唇を離して、五秒ほど荒く甘い息で】

ちゅっ……くちゅっ、ちゅるっ。はぁ……はぁ……。

【自分の気持ちを悟られまいと、うっとりした声を出す】

なんだか……不思議な感じ……ね。この部屋に、貴方がいることも。今こうしていることも……。

【五秒ほど、軽く唇を合わせるだけのキスをしてから、やや荒い息で】

ちゅつ。……あ。……というか。まだ、ちょっと信じられないかも……。

【つい不安が漏れてしまい泣きそうな声で】

てつきり、正体を知られた後は。嫌われてしまっただって終わりだと思っていたから……。

【耳を軽く撫でられ、びくっと反応して】

んっ……。あ……。

【感じてしまいつつ、ゆっくり呼吸を整えてから。主人公から触れると、嬉しさのあまり期待してしまう】

ううん、違う。本当は期待していたのかもしれない。

【本音が漏れる。甘く高い声で。特に重要なセリフなので、大切に演じて下さい】

私はずっとこうなりたかったの……。

【一呼吸置いて】

ずっと、貴方にすべてを知って欲しかった……。

胸を張って、貴方の恋人だと言える存在になりたかった。

【緊張と興奮を抑えるため、三秒ほどゆっくりと口呼吸してから】

呪いが解けるのは絶望的だと知りながら、どうしても諦めきれなかったのは……。

貴方なら、すべてを打ち明けても。まだ私と一緒にいてくれるんじゃないかって。

【声がか細くなり】

心の奥底では、期待していたから……。

……本当に私、身勝手よね。貴方はこんな私のこと、怒ったっていいのに……。

それでも傍にいてくれるなんて。本当に、優しいんだから……。

大好き。いつも本当にありがとう。

【やや間を置き。『いつか、必ず呪いを解く方法を見つけよう。どんなに時間がかかっても、私はずっとカレンのそばにいるよ』と言われ】

えっ……。？ 絶望的じゃ、ない……。？

【強く戸惑って】

そんな……。私と、探してくれるの？ 呪いを解く方法を？

見つかるまで……。ずっと一緒にいてくれるの？

【『そうだよ。私も、カレンのことが大好きだから』と言われ】

ありがとう……。私も……。私もよ！ 貴方が大好き。

ずっと、こうして……。貴方と一緒にいられる人になりたい」

カレン、泣き出しそうなほど嬉しいが、まだ信じ切れていない。

主人公は自分のために無理をしているのではと感じている。また、呪いを解くのは不可能だろうとも思っている。

しかし、自分はそんな、主人公の真面目で優しいところが好きだと思い、主人公の勇気を本心から褒めることにする。

「嬉しいわ。ありがとう……。」

そうよね。貴方って、そういう人よね。

どんなに困難なことでも……貴方は決して諦めたりしない。

そんな貴方の姿に、私は勇気づけられたのにね。当の私がくじけてちゃ、いけないわよね！

【演技している】

……私も、諦めないわ。必ず、ここから出てみせる。だって私。貴方と出かけたところ、貴方と見たいもの。本当はたくさんあるの。そのためなら……そうね！ 本棚ごと外に出る形になったって、構わないわ。

【内心は、『それが本当にできたらいいのに』と思っている】

……本棚背負って歩いたって、いいわ。

ふふ……大好き。貴方って、本当にすごいわ。

普段は気の弱そうにしているのに……本当は、誰よりも強いよね！」

② SE: カレンが主人公に抱きつく、どき、という音

カレン、明るく振る舞うが、まだ不安。

しかし嬉しい気持ちも本心なので、主人公に奉仕したいと強く思う。

自分自身が奉仕してもらうことは一切考えていない。

【嬉しそうに】

大好き。私、貴方のためだったなら、なんだってしたい。

いいえ、するわ！ 好き……本当に大好きよ。

【五秒ほど、何度も軽くキスをして。やや甘く】

ちゅっ、ちゅっ。あのね……今ね。私、貴方の喜ぶこと、全部したい気持ちなの。

【真面目に】

させて、欲しいの。

だから。その……うまくできないかもしれないけど。精一杯、するから。

【内心では、『ここで主人公に拒絶されたら死んでしまう』と思っている】
しても……いい？

【泣きそうな声で。主人公が明らかに緊張しつつも頷いたので】
ふふふふ……。ありがとう！

【軽くキスして、うっとり主人公の頬に触れながら】
ちゅっ。ふふ。気持ちいい。貴方のほっぺ、すべすべね。
ずっとさわって、いたいかも。

【すう、っと、ゆっくり息を吐いてから。明るいが、どこか悲壮感がある】

今ね……夢みたいな気分よ。

大好きな貴方と、今までよりも、もっと仲良くなれるんだもの。

【思うように事が運び、安堵した気分だったが、そこで主人公に『自分は処女で、性行為の経験はない』と伝えなくてはいけないと感じ。やや申し訳なさそうに】

……あの、私。こういうことは。

恋人同士とする、キス以上の、ことは。したことがないのだけど……」

カレン、緊張して震えている主人公の額に、自分の額を寄せる。

当然ながら、主人公も処女で、初めて。

にもかかわらず主人公が自分の手をぎゅつと握り『私もないけど、カレンとしたい。初めての人はカレンがいい』と言ってくるので、たまらなくなる。

この人を信じてもいいのだろうか、と思い始める。

「ほっとしたように」

貴方も同じように緊張しているんだって思ったら……なんだか安心、したかも。

【言葉とは裏腹に、感動で声が震えている】

大丈夫よ。どきどきしてるのは……私も一緒。だから……いつもと同じで、大丈夫よ」

②⑨ SE：もぞもぞと布団の上をカレンが動く、布がこすれる音

カレン、主人公の頬を両手で包んで、甘くキスをする。主人公のことがたまらなく好きだ、主人公のためなら何でもしたい、と感じている。

「キスしながら、時折唇を離して笑う」

ん……ちゅっ。ふふっ……ちゅっ。れろっ……ちゅばっ。ふふふ……。

『気持ちいい……』？ ふふふ……私もよ。もっとしたいし……。

【キスをして】

ちゅっ。

【甘く息を吐いて】

ずっと……いくらでも、ずっと……。

【キスをして、心底幸せそうに】

ちゅっ。……していたい……。

私たち……キスするのは、初めてじゃないけど。今日。初めてした日みたいに、幸せな気持ちよ。

【ひときわ甘く】

好きよ……。大好き。

【嘘を言う】

ずうっと、一緒よ。

【『私もカレンが大好き』と言われ、嬉しそうに。心臓が飛び出しそうなほど嬉しいが、冗談めかしてしまう】

……え？ ううん。私の方が好きよ。私の方が、貴方のこと、大好き！

【『それは納得できない。私の方が気持ちがいいよ。私の気持ちの方が強い』と言われえっ？ そこは譲れない？ 『私の気持ちの方が大きくて強い』？

【泣き出しそうな声で。主人公の髪を撫でながら嬉しそうに】

うふふ。……意外と頑固、なのよね？でも、譲らないで……私も譲らないから。ふふふ……。あのね、今すごく幸せなの。

私、本当はずっと。この部屋に貴方を招いて……。

こんな風に、いちゃいちゃしてみたかったの。

【主人公の体温を感じてうっとり】

ああ、暖かい……。貴方は、身体も。心も。すべてが、とても暖かい。

こうして、肌をくっつけているだけで。とても安心する……」

カレン、主人公の身体に手を這わせ、寝間着を脱がせていく。

主人公もそれにならない、脱がせあう形になる。

カレン、主人公にとってできるだけ優しく、幸せな思い出にしたいと考える。

自分であればどうしてほしかと考え、できる限り理想的に愛そうとする。

③⑩ SE:うん、う服を脱ぐ音

「……ね。このお洋服、どうやって脱がすの？

【方法がわかり明るい声で】

あ、こうかしら。ふふふ」

③⑪ SE:うん、う服を脱ぐ音

「主人公が自分の寝巻のボタンに手をかけたので驚いて。内心非常にドキドキしている。

そのまま脱がしてもらう】

あつ……。うん。私も……お願い、するわ。脱がせて……くれるかしら？

【少し声が小さくなる】

……なんだか、当たり前なんだけど。

【さらに声が小さくなる】

すごく恥ずかしい……。

【一瞬間を置き。主人公が申し訳なさそうに手を引つ込めたので】

あ。い、いいの。やめないで……！して、いいのよ。……うん。して、ほしいの。

【軽く胸に触れられて】

あっ……。

【主人公の手が不安そうに止まったので】

平気よ……続けて、いいの。ちょっとびっくりした。ただだから……。

【振り絞るように】

嬉しいから……。

【やや間を置き。声が震えている】

あ、あの、ね。実は……。私の、身体。

【やや間を置き。恥ずかしいので言い出しづらい】

本当はね。い。一生。誰にも触ってもらえないのかもって思っていたの……。人間で、なくなってしまった私には。

【「セックス」を言いづらそうに】

……セックス。なんて、きつと縁のないこと……。

私は生涯。いつ命が終わるかもわからないまま。

誰にも愛されずに生きていくのが自然だって……。

そんな風に、悲観したこともあったから……。ちよつと、緊張して、しまつて。

【本音を言いすぎたと感じ。声を慌てて明るくする】

……でも。今は貴方がいる！

貴方が。すべて知った上で……。それでも私に触れてくれる。

私ね。今。

【「とつても」に力をこめる】

とつ、とても幸せよ。

こんなに素敵な貴方と、こんなに素敵な時間が過ごせるんだったら。

【声は明るい涙ぐみ】

今までの淋しさも全部無駄じゃなかった。

大好きよ。私を選んでくれて。本当にありがとう……。

【ぐす、と鼻をすすする】

ふふ、大好き！」

③② SE:いぞ、と服を脱ぐ音

③③ SE:下着のホックを外す音

【胸があらわになったので、恥ずかしそうに】

あっ……。

う。うん、大丈夫……。私の……胸。

【甘く】

さわって……？

【胸に触られ、びくつと反応する。自分には無縁のことだと思っていたので、感動のあまり息が止まりそう。触られながら、次第に息が荒くなってくる】

あつ……。ん、はあ……。はあ……。あつ。

うん……。平気よ。貴方の、好きなようにして、大丈夫。

【落ちてこうとしているが涙が出てきてしまう。荒い呼吸を整えながら、恥ずかしそうに】
はあ、はあ……。あの……。ね。

ちよっとくらい……。乱暴になったって、いいの。よ。

貴方も私の身体に関心があるんだって思うと。嬉しいし……。

そんな貴方も……。私、見てみたい、の。

だって。あの。もう、もちろんわかってるだろうけど……。

【決死の思いで、勇気を出して打ち明ける】

私、ずっと。貴方に愛してもらうことが夢だったの。

だから私。貴方にだったら、どんなことだって……。して、ほしいの」

主人公、カレンの反応を心配そうにうかがいつつ、次第にしっかりと胸に触れていく。

【大きな声が出ないように、ゆっくり息を吸って耐えるように】

あ、っ。ん……。ああっ……！

なんだかつ……。あつ。んんっ……。

【五秒ほどかけて、荒い息を落ち着かせる。主人公に『大丈夫？』と聞かれ。なんとか落ち着いているように見せる】

うん。大丈夫よ……。なんだかね？ 不思議な感じなの……。

貴方に、触れられて。とても恥ずかしいはずなのだけど……。

【自分自身わかりかねている様子で】

すごく落ち着く、ような。これが、すごく安心することのような。そんな気もするの……。

【すう、はあ、と大きく呼吸しながら、一度穏やかな息遣いになるが、再び感じてしまい】
んっ……。あ。はあ、はあ、はあ……。

【観念したように】

うん……。っ。すごく、気持ちいい……。

あつ、はあ、はあ……。

【主人公に笑顔を見せて】

ふふ。すごく幸せよ……。」

主人公、緊張しつつも、カレンの乳首にそっと吸い付く。

【先ほどまでより、明らかに高い声で】

んっ……！

【自分の声に戸惑って】

あ……。

んっ」

カレン、主人公が自分を気遣いながら吸っているのを実感し、安堵した優しい気持ちになる。このままずっとこうしていてほしい、と思う。

主人公が自分の子どもになってくれたような気持ちで、胸がいっぱいになる。

【高く甘い声で】

んっ……。あぁっ……。

ありがとう……。私を気遣って、くれるのね。

でも大丈夫……。その……。もっと強くしたって……平気よ。

【こんな状況だが、素直に気になる】

というか、その……。どんな感じ？ なの？ おっぱい、吸うって、いうのは……。

【『カレンと一緒にだと思う……。どきどきするけど、すごく自然な気がする』と言われ】

あ、んっ。そう……。なの？

んっ、あ。あぁっ……。

【荒い息で、ゆっくり話す。戸惑いつつ嬉しそうに】

私は、ね。今、貴方のことが、すごく可愛い……。

んっ……。夢中でおっぱい吸ってる、貴方を見てたら……。

なんでもしてあげたいって、気持ちに。んっ、なるの……。

【声が出ないように、十秒ほどゆっくり息を吐いて耐えようとする】

あ……はぁ……はぁ……。

【耐え切れなくなりやや大きめの声が出る】

あぁっ……！

【朦朧とした雰囲気で、ひときわ甘く】

すごく幸せ……。ありがとう……。好きな人に、してもらうのって。こんな気持ちに、なる

もののなね……。

すごい……。

あ。こっちのおっぱいも、欲しいの……？

【主人公が先ほどより積極的なので、少し驚いて】

う、ん……。あげるわ……。

【恥ずかしそうに。自分自身、この言い方はいかなものかと思いつつ】
どう……ぞ？

あつ……。

【甘噛みされたり、強めに吸われるたびにびくつと反応し、声が出る。十秒ほど】
んっ。ん……ああつ。んっ、ふっ……んう。ん、あつ……。

【涙ぐんで、呼吸を整えようとする】

はあ、はあ、はあっ……」

主人公、カレンの乳首から唇を離し、顔を上げてカレンとキスをする。

【十秒ほどキスする】

んっ……。ちゅっ。ちゅっ。

【三秒ほど荒い呼吸が続く】

はあ、はあ、はあっ……。

【もう一度キスして】

ん……ちゅっ。ちゅっ。

ふふふ……幸せ。

【五秒ほどかけて呼吸を整える。それでも、主人公が自分の胸を触っているので、このままではいけないと感じる】

でも……。んっ。あ。

もう……！　なんだか貴方ばかり、ずるい。わ……！

……ねえ。私もしたい！」

③④ SE: ぽや、と主人公を押し倒す音

カレン、主人公をベッドに押し倒し、主人公の鼻に自分の鼻をくっつけて笑う。

カレン、自分の方がはるかに年上である以上、自分がリードするべきだと感じている。本心ではあのまま攻められていたかったが、それはいけないと思っている。

「ふふっ。さっきまでと、逆ね。

うふふふっ……。……うん。なんだかいい感じ。しっくりくるわ。

【“こういうのは「番」というのだろうか、と思いつつ】

今度は、私の番？　なんだから。

ねえ。私もしたい……。させてくれる？」

【4】お姉さんみたいなカレンからの、やさしくて甘いえっち

③⑤ SE: もぞもぞと布団の上をカレンが動く、布がこすれる音

カレン、主人公を攻める。

主人公は些細な愛撫でも反応し、カレンは自分のしたことで主人公が感じているのだと思うと喜びでいっぱいになる。

カレン、せめて今日だけでもたっぷり愛させてほしい、と願う。

【主人公の首筋に舌を這わせる。ちゅるっ、と小さめの音が鳴る】

ふふ……。ちゅるっ……。ん。

【耳の後ろを舐める。耳から近いので、やや大きめの音】
れろっ。

【嬉しそうに笑い囁くように】

ふふっ……。貴方のお耳……。可愛い……。

【耳の外周をくわえる。十秒ほど丁寧にゆっくりと耳を舐める。次第に大きめの音になる】
はむ……。ん。くちゅっ、れろ……。じゅるっ。

【荒くなった呼吸を整えて】

はぁ……。はぁ……。ふふ、気持ちいい？

【主人公が目を閉じて、気持ちよさそうにしているのを見て嬉しそうに】

私は。すっごく気持ちいいわ……。

【『されているのは私の方なの？』と聞かれ、頷いて】

そうなの。してる方だけど……。とても気持ちいいの。

私が、何かすることで、貴方が反応してくれると……。嬉しくて。
すごく満たされるの……。

【話しながら、自然に胸に向かうようにキスしていく】

れろっ……。好きよ……。ちゅっ……。大好き。

貴方の身体は……。暖かくて……。すごく気持ちいい。

貴方のお胸……。好き。柔らかくて、触れるとなんだか安心する……。

【母親のように優しく】

……。うん？ 自信がないの？

【主人公から胸のコンプレックスを打ち明けられる。しかし、今ひとつ同意しかねる様子で】
あらそう？ 私はそうは思わないけど……。

【優しく自然に、あまり大げさでなく】

うん。私は好きよ。貴方のお胸。

どこもおかしくないわ。とても綺麗よ。

【主人公が『ありがとう……』と言いつつ、自信なさげなので】
うん……そうね。身体以外のことでも……。なんでも。

自分自身のことだと……好きになれないところばかり気になってしまうものなのかもね。

【※マークまで、これが最後かもしれないので、優しく、真剣に伝える】
でもね。いくらでも言うわ。貴方は素敵よ。

貴方は私の知ってる……誰よりも魅力的な人。

心も、身体も。全部大好きよ。

貴方には、貴方だけに出来る立派なことがたくさんある。それを忘れないでね。※

【声が震える】

たとえば……。私をこんなに幸せな気持ちに出来るのは、ずっと……。この世で貴方だけよ」

カレン、泣きそうなのをごまかそうと再び主人公の身体を愛撫し始める。

次第に、下半身へ向かっていく。

主人公は、カレンの頭を優しく撫でている。

「……ふふ……。」

【主人公の乳首に吸い付いて】
はむ……。んっ。くちゅっ。

【いたずらっぽく】
ちゅるっ……。うふふ……。さっきと逆ね。

【主人公の乳首が勃起しているのを見て、思わず見たままを述べる】
貴方の……。ここ。すごく固くなってる……。嬉しい……。

【興奮して、五秒ほど吸い付いて舐める。それから恥ずかしくなり】
ちゅばっ……。くちゅっ、くちゅっ。すごい……のね。

【舐めながら話す。嬉しくて信じられない、という調子で】
れろっ……。私が『べろっ』……。って、したから。くちゅっ。さっきの私……。みたいに。ちゅるるっ……。気持ちよくなって、くれたの……？

【『嬉しい』の『し』あたりでまた吸い付きながら】
嬉しい……。んっ……。はむ、ちゅばっ。

【十秒ほど乳首に吸い付く。うち「回、派手な音がする。音を立ててしまってから、自分でもこんな大きな音が出ると思わず恥ずかしそうに】
じゅるっ……。じゅるっ、くちゅるっ。……。あ、音……。ごめんなさい……。

【自分でも抑えきれないほど興奮して】
だって貴方があんまり……。可愛いから……。
たくさん、してあげたいの……。

【熱っぽく】

好きよ……。

んっ、ちゅぱっ、ちゅるっ……。

【興奮しつつも、あくまでゆっくり呼吸しようとする。口呼吸気味で】

はぁ……はぁ……。すごい……。あぁ……。ちゅぱっ、ちゅぱっ、くちゅっ……。

【優しい声で】

たくさん。気持ちよくなってね……。

【主人公が感じて、うっとり涙を浮かべているので、もっと愛撫したくなり。優しく】

ふふ。こっちもさわつていい……？

ありがとう……。あぁ……好きよ。大好き……」

③⑥ SE:いそ、と主人公の下着を脱がせる音

【主人公の耳元に唇を寄せながら、股間を指で愛撫する。ひととき優しい声で、小さめに】

ふふ……貴方のおそこ、すごく熱くなってる……。ちゅっ。

大丈夫よ。とても、素敵よ。

私、嬉しいの……。私の手や、唇や、舌で、貴方がこんなに喜んでくれるのが……。すごく嬉しい。

だから、いくらでもしてあげたい気持ちなの。

ちゅっ。だからね、いいのよ。私に身を委ねて……私に貴方を、愛させてね。

【主人公を少しでもリラックスさせようと、髪を撫でて】

ちゅっ。ねえ……貴方の髪って、とても綺麗ね。きらきらしてる。

ふふ、撫でられると落ち着くの？ いい子、いい子。このまま、しましうね。

【一呼吸置き。ひととき優しく】

足を開いて……？

【主人公がとても緊張しているので、愛おしくなり、自然と気分が落ち着く】

ふふ……ちゅっ。大丈夫よ……。すごく可愛いから。

【心底嬉しそうに】

あぁ……。貴方の初めてが私で嬉しい……」

③⑦ SE:主人公が足を開き、くちゅ、と水音が鳴る

【主人公の股間が、とろとろに濡れているのを知って、感激しつつも優しく】

ええ……。溢れて……きてるわ。すごく可愛い……。

うん、ゆっくりしましうね。時間をかけて。

たっぷり、すりすりって、してあげるわね。ふふ」

③⑧ SE: ちゅぽ、と、主人公の股間にカレンの指が触れる水音（継続して流れる）

【努めて大きな声を出さないようにはしつつ、喜びで声が震えている】ちゅっ。うん……可愛い……。貴方の、この可愛いところ。

熱くて、とろとろになってる小さなでっぱり。たくさん撫でてあげましょうね……。

【キスしながら触る】

ちゅっ……ちゅっ……。うん、いいのよ。私につかまって……？

【主人公が特定の場所への刺激と、刺激するペースに反応するので愛しくなり】

ふふ、気持ちいいの。このくらいがいいの？

こう？ ……ちゅっ。あ……これが好きなのね……？

いい子ね……大好きよ。

【口呼吸気味で。興奮しつつも、あくまでゆっくり呼吸しようとする】

はあ……はあ……はあ……。ねえ……いっぱい溢れてくる……。

ふふ、嬉しいわ……。

さつき、貴方のお胸の先っぽが、硬くなっていたのと、同じよね。

【興奮で声が甘く高くなる】

私の手で、こんなに気持ちよくなってくれるのね……。

ああ……好きよ……。貴方がしてほしいだけ、してあげるから。

ふふ。ねえ……貴方のここも……。舐めて、いい……？」

カレン、一度身体を離す。

それから主人公をベッドの上に座らせ、自分は寝そべる形で主人公の股間に顔を近づける。それから、主人公の太ももをそつと支えるように持って、股間を舐め始める。

【十秒ほど舐める。あまり大きな音を立てず、丁寧に】

ぴちゃ……ぴちゃ、ちゅぷっ……。んっ、ぷっ……。、ぴちゃっ、ぴちゃっ。

【舐めながら甘い声で、やや不安そうに】

ふふ……どうかしら。上手に……できてる？

【主人公が何度もこくこくと頷くので、いとおしくなり】

ふふ……良かった。嬉しいわ……。

【五秒ほどする音。コツを理解したように。愛液を上品にすすする】

ふふふ。んっ……。くちやつ、ちゅるっ……。

【主人公の喘ぎ声を聴きながら】

気持ちいいの……？ 嬉しい……。

【『舐めて大丈夫なの……？』と聞かれ】

ふふ、大丈夫に決まってるじゃない。

私が、欲しいの。舐めたいの……。たくさん、私に、飲ませてくれる？

【すすりながら話す。とても濡れているので、すする音が大きくなる】

ちゅるっ……。れろっ。んっ、ちゅるるっ……。

ああ……。気持ちいいのね。うん、いいのよ。

【次の「」までまたがる※マークまで、ひときわ優しく】

ちゃんと身体……支えてるから」

③⑨ SE: ちゅぽ、と、主人公の股間にカレンの指が触れる水音。ゆつくりめで、何度も流れる。少しずつペースが速くなる。

「んっ……。じゅるっ……。ちゅるるっ。ふふ……。こうしてほしいのね？
可愛い……。うん。大丈夫よ。」

【右手の指でも触りながら、十秒ほど夢中で舐める。左手は主人公の右手とつなぐ】

んっ……。ちゅるっ、じゅるるっ。ええ。こっちの手は握っているから。

安心して、気持ちよくなってね。ふふ……。

【ゆつくりと。主人公が特に感じるところを見つけて】

あ、ここね……。？　ここが気持ちいいのね。たくさん、しましろう？

んっ、ふっ。ちゅっ……。ちゅぽっ、ちゅるっ。※

【主人公が達しそうなので興奮して】

ああ……。可愛い……。とてもいいのね？

そのお顔。すごく可愛いわ……。ちゅっ。

うん、いいのよ。いいの。いつでも、達してしまつて。私、ちゃあんと貴方を支えているわ。

【主人公が達しそうなのを知り、ややペースをあげる】

んっ、じゅるるっ、ちゅるるっ。れろ……。じゅるりっ……。びちゃ、びちゃっ。

【『あ……。！』で主人公が達する。それまで、震える主人公を支えながら舐めるのが困難な

ため、息が荒くなり、喘ぎ声のような声が出る】

ん、ん。んっ、く。あ……。はあ……。はあ……。はあ……。じゅるるっ……。んっ。

ん、んっ。んうっ……。あ……。！　はあ、はあ。ん、ふっ。あ。はあ……。はあ……。

【優しく。五秒ほどかけて呼吸を整え終えてから】

……。あ……。気持ちよかった……。？」

カレン、達してしまいがったりとしている主人公を優しく抱きしめる。

カレン、『自分であればこうして欲しい』と思うことをしている。

これで終わってしまうのかと思うと悲しいが、少なくとも自分はとても幸せだった、と感じる。

「ふふ……よし、よし。ちょっと疲れたわね？」

ありがとう……。私で、気持ちよくなってくれて。

【優しく】

すごく嬉しかったわ……。

うん、大丈夫よ。落ち着くまで、ずうっとこうして、ぎゅうってしているから……。

よいしょっと……。ほら。少し休みましょう。ふふ。私の可愛い貴方……。愛してる……。

いい子、いい子。私、貴方のおい、大好き……。

【優しく髪を撫でながら】

安心してね。眠ってしまってもいいのよ。起こしてあげるから。

ちゅっ。大好きよ……」

主人公、ぐったりしているにもかかわらず、なんとか起き上がろうとする。

カレン、なぜそうしているのかわからず、不思議そうにする。

まだそばにいてくれると信じたいが、主人公は帰りがっているのかもしれないと思うだけで胸が張り裂けそうになる。

「うん？ もう大丈夫なの？」

【ゆっくりと】

ふふ、なでなで。

無理しなくても、大丈夫よ？ 二時間くらいしたら、起こしてあげるから。

そしたら、明日にも響かずに部屋に戻るわ。

なあに？ 今日は泊まって行ってくれるの……？

【囁くように冗談めかしつつ、本心ではまだ、いくらでもしてあげたい、という調子で】

ふふ。だったら、もう一回してあげましょうか……？

【主人公に『私もしたい。私もカレンのこと、気持ちよくしたい』と言われ。予想していなかったので驚いて。このままおしまいだと思っていた】

えっ……？」

【5】少女みたいなカレンへ、あなたからの真摯なえっち

主人公、カレンの手を握る。

主人公『私もカレンにしてあげたい。違う………したいの。私にもさせてほしい』と言う。

カレン、自分からはとても頼めないと思っていた上、胸を愛撫してもらっただけで充分。と思っていたので驚く。

しかし、内心は期待していたので、声が震える。

「わ。私にも、して、くれるの……？」

【一度声が大きめになった後、次第に小声になり、声が震えてくる】
あ。そんな。い！ いいのよ……。わ、私、は。貴方に、してあげられるだけで……。さつき、貴方が触ってくれた分。あれだけで充分幸せよ……」

カレン、言葉ではそう言うものの、頭がくらくらするほどときどきしている。内心は主人公に愛して欲しくてたまらない。

だが、自分はずっと正体を隠していた嘘つきである上に、そもそも主人公よりもはるかに年上。

容姿こそ若いが、実際はお婆さんを抱くようなもの。

そんな自分が愛する主人公の相手になるのだと思うと申し訳なくなり、とても悲しくなる。年齢のことはできるだけ考えないようにしていたが、ここで向き合うことになり、絶望感に襲われる。

先ほどまでのことすら、自分にはしてはいけないことだった気さえして来る。

「そんな……。いけないわ。だって私……。」

【口にするのもつらいが、事実なので言わなくてはならない】

貴方よりずっと……。おばあちゃんみたいな、ものだし……。

【『そんなの関係ないよ。私はカレンが好き。私がカレンにしてもらって嬉しかったこと、私もカレンにしたいよ。でも、カレンが嫌なら……』と言われ】

あ……。そんな……。違うの。

【声が震え、わずかに早口になる】

嫌なわけじゃないじゃない……。貴方にされて嫌なことなんてあるはずがない……。

ほんとは……。本当はずっと、私……。

【泣くのを必死にこらえて】

私……」

主人公、手で口を覆い、泣くのをこらえているカレンに顔を寄せ、手を握りキスをする。

主人公、カレンが今まで自分との関係において、どれだけのことを我慢し、耐えてきたのかを察する。カレンのためにできるすべてのことをしたいと強く思う。

主人公『カレンが何を心配に思っているかは知っているよ。

でもね、私はカレンが大好きだよ。

普通の女の子でも、幽霊でも、おばあちゃんでも関係ないの。私の気持ちはずっと同じだよ。

さつきカレンは、私に支えられてたって言ってくれたけど……。

支えてもらっていたのは、私も同じだよ。

カレンがいつも私を励まして、応援してくれたから、私はいつも頑張れるの。
勇気が出せるの。

こんなに人を好きになったのは、カレンが初めてなの。

だから、私はカレンに触りたいよ。もっとカレンといちゃいちゃしたい。カレンにしてもら
って嬉しかったこと、私もカレンにしたいの。

だから、お願い……私を、カレンの初めての人にしてくれませんか？』
と真剣に告白する。

「長めのセリフが間にあるのを想定し、やや長く間を置く。※マークまで、言いながら、
次第に涙が出てくる」

えっ……？ わか、るの……？

貴方も同じだと、言ってくれるの？ 貴方も私に助けられていたと。

どんな事実を知っても、変わらず好きだと言ってくれるの……？※

【泣きじゃくりながら】

うん……うんっ……。ありがとう……。

【気持ちがあふれて、少しだけ早口になる】

私も貴方が好き。貴方がいい。貴方にもっと触れたい。

【懇願するように】

貴方と身も心も一つになりたい……。

【少し間を置き、数秒呼吸音のみ。それから覚悟を決めて、正直な想いを伝える。声が高くな
る】

お願い……。私を……抱いてください。

私の……初めてをもらってください……」

主人公、こくこくと真剣に何度も頷く。

カレン、先ほども見たしぐさに思わず笑ってしまう。

この自分たちがどうなってしまうかはわからないが、今は主人公が好きだという想いだ
けを大切にしようとする。

「少し間を置き。主人公があまりに真面目なので、思わず笑ってしまい」

ふふっ……。ありがとう。貴方って本当に……素敵な人ね。

【キスしてから、主人公が『じゃあ……』とのおも真剣に聞いてくるので。甘く】
ちゅっ……。うん。私を貴方の……好きなようにして？

【キスして、安堵したように】

ん……。ありがとう。なんだか、すごく気持ちが楽になった……。

【本心から】

ちゅっ……貴方って、本当にすごいわ……。

【主人公の手が優しく頬に伸びてくる。それを受け入れ五秒ほど、呼吸音のみ。やがて、主人公の手が再び胸に降りたので、恐る恐る聞く】

んっ……！ あっ……。あ、の……。もしかして……貴方、おっぱい触るの、好き、なの？

【少し間を置いて。主人公が真つ赤な顔で頷くので、甘く高い声で本音を伝える】

私も、貴方に触ってもらうの、好き……。いっぱい触ってほしい……。それ、から……。

【勇気を振り絞って】

私も好き……。貴方の身体、ずっと触れていたい……。

貴方と裸で触りっこするの、すごく幸せ……。

【お互い胸に触れながら、何度も軽くキスして】

んっ……。ちゅっ。ちゅ、れろっ……。

ふふ、気持ちいい……。大好き……」

カレン、すっかり気持ちいがほぐれて安堵している。

そこで再度主人公が『じゃあ……』と緊張しながら聞いてくる。

どうやら、とにかくカレンの股間に触れてみたい様子。

カレン、そのあまりにも段取りの悪い姿に『先ほどはあんなにも真摯に告白してくれて格好良かったのに……』と、いとおしくなり笑ってしまう。

しかし、こんな時落ち着いてリードできる自分に、長生きもそこまで無駄ではなかったと感じ、少しだけ誇らしくなる。

カレン、主人公の手を取り、内心やはり緊張しつつも、自分の股間に導く。

主人公、カレンの行動に驚くが、傷つけないよう丁寧に触れようとする。

④ SE：へちゅ、と、カレンの股間に主人公の指が触れる水音。ゆっくりめで、何度も流れる。少しずつペースが速くなる。

【「甘く囁くように」】

ええ。……触って？」

カレン、自分でもはっきりわかるほど濡れているので、触れてもらおう緊張と恥ずかしさで声が震える。しかしもう覚悟を決め、自分の気持ちを全部知ってもらおうとする。

「ふふ……おかしいでしょ……。？　ずっと……なの……。

自分が、触ってもらった、わけじゃないのに。

私……貴方を愛しているだけで、こんなになってしまったの。

【少しだけ間を置き】

これが、私の気持ちよ……。

強がって、お姉さんぶって。『してあげるだけで充分』なんてやせ我慢して。本心ではこんなに貴方を求めている……。それが、私なの。

こんな私だけど、貴方が大好きなの。

んっ……。ちゅっ。

【主人公の手に自分の手を重ねて】

だから……私を。貴方だけのものにしてほしいの……。

【主人公の手がいよいよ動き始め。キスしながら愛撫される】

あっ……。ちゅっ。くちゅっ。ん……。あっ……。

あああっ……。

【『カレンのこころ、すごく熱い』と驚かれ。観念して認める】

うんっ……。熱いの……。

私。貴方が好きで、こんなにとろとろの、ぬるぬるになってしまったの……。

本当はね、ずっと……。あ、うっ。こんな風に貴方に愛してもらうのが、あっ。夢だったの……。

いっぱい、して？

【言いながらまた涙が出てきてしまう】

お願い。……貴方が好きなの……大好きなの……。

貴方がいいの。ずっと離さないで。ずっとそばにいさせて……？

【『もしカレンが嫌だって言っても私はそばにいるよ。もう、ずっと離さないよ』と言われ】

うんっ……。嬉しい……。ありがとう。約束よ……？

【主人公の指が特に感じるところにあたり】

あっ……。

【察した主人公に、ゆっくり愛撫される。指の動きに合わせて、ゆっくり喘ぐ】

あっ、あっ、あ。ああっ……。んっ、あああっ……。

【心の底から】

気持ちいい……。

【高い、甘えた声で】

うんっ。そこが好きなの……気持ちいいの……。

あっ……。あ……。ああ……。っ。

あっ……。ああっ……。んっ、んっ。あっ……！

【ひときわ高く】

ああっ……。

【主人公が『うまく愛撫できているだろうか』と不安そうにしているので安心させようと】

ありがとう、すごく気持ちいいわ……。

あ、なたもさっき……こんな感じ……だったの？ ああ……。

そうなのね……嬉しい……。あつ、あつ。あつ。

【主人公に『カレンの中に触りたい。指を中に挿（い）れてもいい？』と聞かれ驚く。さつき自分がそうしなかった通り、その発想がなかった】

あつ。ん……なあに？ えっ？ い、挿れ……？ 私の中に、挿れてみたいの？

【正直に言うところがある。そのため驚きのあまり息を呑み、一瞬間が空くが、勇気を出して。震える声で】

うん……して？ 私もして。欲しいから……」

④ SE:くぼ、と、主人公が指をカレンの膣内に挿入する水音。ゆつくりめで、何度も流れる。

【緊張でくくつ、と、つばを飲み込み。それから高い声で。感じている声のようだが、実際は痛みを耐えている】

ああ……。あつ……。んっ、うっ。あ、すご……。

【『カレン、大丈夫？』と聞かれ。必死に平静を装うが、実際は挿入されて痛い。やや苦しうに】

大丈夫、よ？ ……なんだかね？ ひろげ、られて……。

貴方が入ってくる感じが、すごく、わかるの……っ。

はあ……はあ……はあ……。あつ。

う。恥ずかしい、けれど……あつ。すごく、嬉しい……。あつ。

【強い圧迫感と痛みを耐えかね、十秒ほど口呼吸で荒い息】

はあ……はあ……。大丈夫……よ。

【主人公が、カレンが今どのようなことに感じているのかわからず不安そうなので、教えようとすうとする】

なんだか……圧迫される……？ みたいな、感じ。よ。

んっ。あつ。ああっ。

はあ……はあ……。あ……手を、握ってくれるの？ 嬉しい。

【甘い声で。このままでは、主人公はやめてしまうのではないかと思い】

やめないでね……。今、すごく、幸せ、だから。貴方を感じられて、嬉しいから……。

【わずかに苦しうに。痛いのを隠している。痛みが、自分の中に主人公を感じ、嬉しくてたまらない】

あつ、ああっ。うっ、ああ……。はあ、はあ、はあ。

【涙を流しながら幸せそうに】

あのね……。私。結構長生きしたけど……。

生まれてから今までで。今、この瞬間が一番幸せよ。
今まで、ずっと……。

【涙を流しながら。特に重要なセリフなので、大切に演じて下さい】
生きてきてよかった……。

うん。いいのよ。貴方の好きに、動かして、いいのよ。好きなところ……触って？

【刺激されて声が高くなり】
うんっ……。

痛、くないわ。……あ！

【そこで先ほどまでの苦痛が急に消え、突然感じるようになる。理屈がわからず、自分でも驚く】

気持ち……いいっ……。

えっ、何っ？ 急に……あぁっ……。そこ、だめっ……。

【『だめ』と言うと主人公は本当にやめてしまうのに気づき、甘い声で必死に】

あ、違うのっ。だめじゃないのっ。これが気持ちいいのっ……。うん、してっ？

あ、あっ。あぁっ……。あ！

すごいっ……。何これっ……。気持ちいいっ……。

あ、好き……あぁっ……。あぁっ！

【キスしながら愛撫される。合間に必死に好きだと伝えようとする】

んっ……。くちゅっ。ちゅっ。好き……大好き……。

あっ、あぁあっ。あぁあ……！

【とっくに達しそうだが、少しでも長く主人公に触れていてほしくて耐えている】

あ。んっ、はあ、はあ、んっ。あ、あぁっ……。

うんっ。あ、それっ……。あぁっ！

だめ、あっ、もう、私っ……。

【達してしまう】

あぁあっ……。あ、あぁっ……。！」

カレン、達してしまう。

主人公、震えるカレンの身体を支えて、先ほど自分がしてもらったように落ち着くまで待つ。

④ SE：二人が抱き合う、ぎゅ、という音

【「荒い息を、時間をかけてゆっくり整える。それから甘い声で】

ありがとう……。気持ちよかったわ……。

【「いく」という言葉を言うのも恥ずかしいが、主人公には感謝の気持ちをどうしても伝えたいので伝える】

うん。い、『いく』っていうの……？　した、みたい。

【言ってしまったてからますます恥ずかしくなり】

ああ、恥ずかしい……でも、なんだか嬉しい……。

【甘えた声で】

うん。ぎゅってして……？」

④④ SE: 主人公がカレンの背中を優しくたたたく音

「あのね。本当は……ね？　最初は少し、怖かったのだけど……。貴方がすごく優しくしてくれたから……。

すぐ平気になって、怖くなくなったの。ありがとう……。

嬉しい……私たち、お互いの初めて同士に、なれたのね。

ちゅっ……ふふ、大好きよ……ちゅっ。ちゅっ……。

ええ、私、貴方のものよ。これからもずっと……貴方だけを愛してる」

【6】ふたり、ベッドで真夜中のおしゃべり

数十分後。もう明け方。

カレン、ベッドに腰かけている主人公に水を渡そうと、コップに注ぐ。

④⑤ SE: コップに水をそそぐ音

【コップを手渡して】

……はい。お水。

【優しく】

喉……乾いたでしょう？　どうぞ。

うふふ……こうして一緒に一晩過ごせるなんて、夢みたい。

【やや間を置き。恥ずかしいが嬉しい、という調子で】

実はね、私、こういうのに憧れていたの……。

【『水を飲むことに？』と聞かれ、『事後』を意味する『終わって』という言葉を恥ずかしそうに】

そう……。その……**終わ……って？**　お話する、っていうのに……。

【ベッド脇の本棚に刺してある本を指さし】

その本棚の……赤い本に。そういうシーンがあって……。

いつか、好きな人と……私もこんな風に過ごせたらって……。

だから、今、夢が叶った……気持ちなの」

主人公、少女のように照れているカレンがいとおしくなる。

主人公、布団に入り、両手を広げ、『こっちへおいでよ。さっきみたいにくつついて話そう？』と優しく声をかける。

【心から嬉しそうに】

あつ……。ぎゅって、してくれるの……？ ええ！ こ一緒……するわ」

④⑥ SE：もぞもぞと布団の中へ入る、布がこすれる音

カレン、主人公から空のコップを受け取り、ベッド脇の机に置く。

二人、一緒にベッドに入り、添い寝しながら話す。

「ふふ……こうして一緒にベッドで寝ていると、数時間前に戻ったみたいね。
ちゅっ……。ふふ、嬉しい。」

【『もつとカレンのことを聞かせて』と言われ】

うん？ 私のことをもつと聞きたいの？

【過去の話はあまり面白く話せる自信がない。そのため、やや困った調子で】
そうね……。少しお話ししましょうか。

『私がまだ普通の人間だった頃』？ この部屋に来るまでの話がいいの？

【リクエストには従いつつ、暗い話になるのは避けられないため、わざと明るい口調で】
うふふ……。あのね、私実は、本物の貴族だったのよ！

そう。驚きでしょう？ 結構裕福だったの。

イギリスの……とてもものんびりした。平和な家で育ったの。

【やや恥ずかしそうに、自嘲気味に。昔の怖いもの知らず過ぎる自分は、いわゆる黒歴史】
昔の私は、怖いもの知らずでね。……うん、今とは結構性格が違ったの……。『自分は何でもできる』『自分がちゃんと考えて行動すれば、不可能なことは何もない』……本気でそう思っているような、馬鹿な子だったの。

【やや間を置き。わずかに声のトーンが下がる】

だから。十七歳の頃。家に妙な人が出入りしていると気づいた時も。自分であれば解決できると思った……。

【自分の声が恐ろしくなりかけているのに気づき、意識して穏やかなトーンに戻る】

黒魔術？ っていうの？

その頃度々家に来ていた怪しい男が。

それを用いてお父様を陥れようとしていることに。ある日私は気づいてしまったの。
うちの人って、みんな人がよいというか、ちょっと騙されやすいっていうか……。

そういう。ちよつと隙のある人たちだったから。

だから『私が助けてあげなくちゃ』って。『私がお父様を、ラングフォード家を守る』って。

【後悔と自嘲が混じった声】

本気でそう思っていた……。

【目線を、自分を縛り付けている本に向け】

だから私が……最初に『あの本』に触れた。

ある日男が置いていった、奇妙な本。その中身を、お父様たちよりも先に見て。怪しい本だったら、勝手に捨ててしまおうと思ったのね。

【わずかに声のトーンが下がる】

……私なら、正しく処理できると思ったから。

とても優しいけれど、ちよつとおっとりしたお父様よりも。

純粹で、疑うことを知らないお母様よりも。

もうすぐお嫁に行くお姉様よりも、私こそが適任だと思ったから……。

【わずかに間を置き、自分の油断を自嘲するように】

ふふ。……その結果が、これってこと。

呪いは。最初に本を開いた人にかかる仕組みだったのでしょね。

男は、本の中に家族全員を閉じ込める気だったのかもしれないけど……。

結局、対象は私になった。

実際に捕らえられたのは、当時まだ十七だった私だけってこと。

【わざと明るく】

まあ、その点においては、『私、よくやったわ』って思ってるわ！

【実際に見届けたわけではないので、希望的観測として話す】

……きつと、家族を守ったんだもの。

【『カレンの家族は、今は……』と聞かれ】

ごめんなさい。それは私にもわからないの。

私の家族がその後どうなったかは、私にもわからない。

私は本ごと。すぐさま持ち出され……このページに描かれている、暗い部屋から出られないまま長い時間を過ごした。

それでもどうにか抜け出して……。

気が付いた時には、自分が日本に運び込まれ、肉体を失っていることを知ったから。

【主人公がまた泣きだしそうになっているので、ささやくように優しく】

だから、私の家族と直接会ってもらうことはできないけど……。

どんな人たちだったか。話すことはできるわ。聞いてくれる？」

カレン、主人公がうつむいているので、また泣いているのではないかと不安になる。

しかし、主人公は顔を上げると『子孫の方なら会えるかもしれない。いつか、一緒にイギ

リスまで探しに行こうよ。……イギリスにいるとは限らないけど……必ず見つけよう?』と
言い、カレンの手を握る。

カレン、主人公はすっかり落ち込んでいるとばかり思っていたので、その暖かい言葉に驚き、
感動する。

「えっ……?」

【感激して】

ありがとう……。貴方って本当に、前向きで、優しいのね。

そうね。貴方の言う通り。私の家族の血を引く方なら、きっとどこかにいるわよね。
ありがとう。いつか一緒に。探しに行きましょう?

私も……会いたい。貴方に……私の大切な人のことを知って欲しい。

それに。お姉さまの子どもだったら、男性でも女性でも……きっと、大層な美形でしようし!
一目お会いするのが楽しみだわ。

【冗談めかして】

ああ、でも。目移りしちゃ、いやあよ。貴方の恋人は私なんだから!

【一呼吸置き、幸福をかみしめるように】

ああ……打ち明けられたことで、こんなに未来が広がるのね。

貴方は本当に。私にたくさんの希望を与えてくれる……。

【急に思いついたように】

ねえ。私、体力をつけるわ!

走るのは無理でも、トレーニングならできるし。背筋でいいのかしら?

【『カレン、本当に本棚を背負って歩くの……?』と主人公におそるおそる聞かれ】

そう。本棚を背負うの!

ずっと悲観して、幽霊ごっこに甘んじていたけど……。

本当は、できることはいくらでもあったんだわ。

ふふ。明日がとても楽しみ……。

これもすべて、貴方のおかげね。貴方って、本当にすごいわ。

そうだ。ねえ……たとえば……!」

主人公、はしゃぐカレンがいとおしくなる。

主人公、優しく頬を撫で『カレンは可愛いね。今までずっと、私よりもお姉さんだと思って
いたけど。本当は、すごく可愛い人だったんだね』と言う。

カレン、『かわいい』はずっと主人公に言われた言葉だったので、とても恥ずかしくなる。

【動揺して】

あ……っ? なあに? なに急に……。そんな……『カレンは可愛いね』なんて……。

貴方の方が可愛いわ！

【今度は優しく髪を撫でられ。声が小さくなる】

もう……もう！ でも嬉しい……。

【一呼吸置き。自分の気持ちを認める】

ふふ……。うん、私、貴方の可愛い恋人になりたい……。

これからもずっと……そばにさせてね。

【『もちろんだよ』と言われながら、さらに撫でられて】

嬉しい……。あつ、もう、くすぐりたい……！ ふふっ、うふふっ。貴方の手、暖かい……。

【次第に眠くなってきて】

こうしてる、と。なんだか……。ん……なんだか……。

【眠ってしまう。しばらく寝息】

ほっとして……。ん……すう……すう……」

④⑦ SE: 主人公がベッド脇のランプの明かりを消す「カチャ」というスイッチ音

【7】ある冬の朝、カレンの部屋で

冬。十二月の寒い朝。朝七時ごろ。

主人公、カレンの部屋のベッドで寝入っている。

しかし、身体に密着する暖かいものを感じ、ゆっくりと目を覚ます。

目を開けると、すぐそばでカレンが楽しそうに笑っている。

④⑧ SE: もぞもぞと布団の中のカレンが動く、布がこすれる音

【笑いをこらえる上機嫌な声。主人公を起こさないように密着していたが、次第にこらえ

きれなくなり】

うふふふふっ……。

【やや申し訳なさそうに。起こすつもりはなかったため】

あ……起きた？」

カレン、主人公と目が合うと、唇にキスをする。

「ちゅっ……。ふふ。よく眠っていたわね。

昨日は疲れたものね。もう少し休んでいても、いいのよ？」

【主人公が自分を抱き寄せ、キスをして来たので上機嫌で】

あ……。んっ。ちゅっ。なあに……？ 朝から。

【もしかして、主人公は朝から自分としたいのかと思い、戸惑いいつも嬉しくなって】
あつ……意外と、大胆なのね……？ でも、貴方がしたいなら、私……。

【そのつもりになりかけたところで時間を聞かれ。本当はもう遅刻寸前と知っているが、しらばっくれようとしている。そのため穏やかに】

うん？ 時間？ まあ……！ もう、こんな時間なの？

【言葉とは裏腹に、最初からさぼるつもりでいる。可能なら、始業まで起こさないようにしたかった】

……このままじゃ、きっと遅刻しちゃうわね。

【甘えるように】

でも……一緒に遅れていくのも、なんだか気まずいわね。今日はこのまま、ここの……。

【主人公が『それはいけないよ。行かないや！』と立ち上がったので】

ええ？ 行くの？

【少し残念そうに】

本当に真面目なんだから……。

【しかし、自分は主人公のそういう部分が好きだったと思うだし。歌うようにうっとり】

ああでも！ 私、そんな貴方が好き……。

【となると、自分もさぼってられないと気づき。やや残念そうに】

ああ、じゃあ私もさぼっちゃだめね。急いで支度しなきゃ。

もう少し余韻に浸りたかった気もするけど……。仕方ないわ。授業は大切よね。

急げばなんとか、駆け込みで朝食も食べられそうだし。きっと大丈夫だと……。

うん？ どうしたの？

主人公、カレンの変化に気づき、驚いて派手に転ぶ。

④ SE: ガタン、と主人公が派手に転ぶ音

「……あら。大丈夫？ ふふっ……。まだ頭、目覚めていないのかしら。

【転んだままの主人公に手を差し伸べ。上機嫌で】

さあ、お手をどうぞ」

主人公『カレン、それ……』と、口をばくばくさせている。

カレン、訳が分からず、主人公を起こしながらもきよんとしている。

「うん？ 足？ 貴方の足に何か？ ……あ、私？」

カレン、自分の足を見る。

右足から鎖が消えていることに気づき、息をのむ。

【五秒ほど沈黙の後、事態が飲み込めない様子で】

えっと……？

これは。どういうこと……かしら？

【やや間を置き。自分がわからないのであれば、当然主人公も理解できていないだろうことに気づく。そのため、主人公に聞いているつもりはないことを強調して早口気味に】

あ。もちろんわかっていてよ。私に説明がつかないってことは……。

貴方にだってわからないってことだもの。

【興奮を抑えきれず】

でも、でも。これって……！

⑤0 SE: ぴょん、と大きく飛ぶ音

「すごいわ！ 鎖がない！

【信じられない、という調子で】

……うん。本当じゃない。信じられない……。

……貴方昨日。もしかしてここまで予想して？

【『そんなまさか。カレンこそ、こんなの想像できた？』と言われ】

いえ、私だって想定外よ……！

第一、いけるかも、って思っていたら。

正体を明かさないうまま……しちやおうかしら。ってなるじゃない。

すごい……！ 私、自由なの？ 貴方のおかげで……呪いが解けたってことよね。

【つまり解呪方法とは、性行為をすることだと察し恥ずかしそうに】

つまり……呪いを解く方法って……そういう……？

【小声で】

どうりで解けないはずよね……。

【さらに小声で】

一人での限り、絶対無理ってことじゃない。でも……解けたのが今で良かったかも……。

【声が元に戻って】

つまり。私。貴方と同年の女の子として、生きていけるの……？

カレン、信じられず呆然としている。

しかし、主人公がまた喜びのあまり泣き出していることに気づく。

「ああもう！ 貴方ってば！

またそんな顔をして……。

【甘く。内心、『遅刻大歓迎』と思っている】

泣いてたら、遅刻しちゃうわよ？　ちゅつ。うふふふ。可愛い」

51 SE：背中を優しく撫でる音

【主人公が何度も頷き、必死に涙をぬぐったので。呆れるというよりも優しい声で】

あ……泣き止むのね。貴方らしいわ。

じゃあ、行きましょうか！　うん！　まずは今日の生活からしっかりやっていきましょう。ふふ。手を繋ぎましょうね。

【昨夜と同じやり取りであるのに気づき。幸せそうにうっとり】

腕だって、組んじゃうから。

大好きよ……。ずっと、ずっと一緒にいましょうね。

私。貴方のこと。絶対。幸せにするわ。

【明るいが泣きそうな声で】

これから、一緒に色んなところへ行きましょうね……。

愛してる。

これからきつと……私たち。色んなことがあるんだろうけど……。

私、何があっても、貴方を愛してるって、誓うわ。

ふふ……貴方も？　ありがとう……。

大好き！

ようし。じゃあ、今日も一日、頑張りましょうね！」

52 SE：ギイ、ギイ、とドアに向かって歩く二人分の音

53 SE：扉が開く音

54 SE：扉がゆっくり閉じる音

（終わり）